

肩書と中身

私はもうすぐ大学院卒業を控えている中、このレポートを書いています。どんなテーマで書くか悩ましかったが、高校生や奨学生のために表題のテーマで書くことに決めました。

私は高松高校を卒業したあと、現役で東京大学文科 I 類に入学しました。その後、弁護士になることを決め、東京大学の法科大学院に進学して司法試験に合格です。大学院を卒業したあとは、司法修習という 1 年間の研修期間を経て、弁護士になる予定です。

ここで話の前置きとして、司法試験の受験制度を説明します。現行の司法試験には受験資格制度が存在し、原則として法科大学院に進学しなければ司法試験を受験することができません。しかし、予備試験という試験にさえ合格すれば、例外的に法科大学院に進学しなくても司法試験の受験資格を得ることができます。この仕組みは、既に社会人である人や経済的に厳しい人など、法科大学院に行く時間的・金銭的余裕がない人であっても法曹になれる道を確認するために設けられた制度です。しかし、現実にはそのような本来の意図から離れた使われ方をしています。というのも、予備試験は、法科大学院に進学するために費やす時間やお金を節約したいときに大学生が飛び級的制度として利用するものになっています。そのため、予備試験を経て司法試験に合格した人は法科大学院を経て合格した人よりも優秀な傾向にあるから、予備試験合格は一つのステータスになっています。

ここで私の話に戻すと、私は大学 3 年生まで大して勉強していなかった。大学に合格すること自体が目的になってしまっていたため、合格した後は燃え尽きてしまったのです。しかし、3 年生になると卒業が近づいてきて、進路を選択する必要が出てきました。そこで、3 年生の冬から、弁護士を目指し始めました。だから、予備試験を飛び級的に利用する必要性も低かったため、そもそも私は予備試験を受験していません。

司法試験の勉強を始めた頃は、自分は予備試験組ではないことに劣等感を感じるがよくありました。また、私は司法試験の勉強を始めたのが、他の人よりも遅かった。だから、法科大学院に入学してからも、他大学出身なのに自分よりも成績の良い子がクラスにたくさんいて、悔しく思うことがよくありました。

そのときに私は気付きました。自分は「東大」という肩書を得て満足してしまっていたことを。東大に入学しただけでは、まだ何者でもないのです。東大に入って遊んでいた人よりも、他の大学に入って一生懸命に学んだ人の方が社会に出て役に立ちます。私は確かに東大に受かったけれど、それは大学受験の時点で合格に見合うだけの実力を備えていたからに過

ぎません。その後、どのような人生を歩むかは、そのときどきに必要な力を身に着けているかに依存します。そして、その力は常に努力し続けられない限り、身につくことはありません。

もちろん、肩書があることはいいことです。大企業の採用では、有名大学しか面接をしないという話もよく聞きます。その意味で肩書を持っていればチャンスは増えます。だが、そのチャンスを生かせるかは、その肩書に見合う実力が伴っているかにかかっているのです。企業の就職の例で言うと、採用されたあと、その会社の中で結果を残していけるかは、その人に実力があるかどうかで決まります。

これは当たり前の事実ですが、私は十分に認識できていなかったのです。だから、油断して他の人に遅れた。だが、この事実は私にとってプラスの事実でもあります。劣等感にとらわれることなく、根気よく努力し続けていれば、今、私が負けている人にも勝てる日が来るかもしれない。私は、いつも謙虚に努力し続ける人になりたいし、後輩や他の奨学生たちにもそうなってほしいと思っています。